

アショー・チン語の音韻と文字

大塚, 行誠
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 | 日本学術振興会

<https://doi.org/10.15017/1518723>

出版情報 : 九州大学言語学論集. 35, pp.239-253, 2015. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室
バージョン :
権利関係 :

アショー・チン語の音韻と文字

大塚 行誠

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所/日本学術振興会)

otsuka_kosei@aa.tufs.ac.jp

キーワード：チベット・ビルマ語派、チン語支、チン族、ミャンマー、ヤンゴン

1. 使用地域と話者人口

アショー・チン語 (Asho Chin, ISO 639-3: csh) は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派チン語支の南部チン語群に属する (Bradley 1997, 西田 1989)。アショー・チン語を母語とする人々のコミュニティは、ミャンマー連邦共和国南西部のヤーワディー・デルタやアラカン山脈南端部に広く点在している。SIL (Summer Institute of Linguistics) International と Bernot



図1 アショー・チン語の使用地域

& Bernot (1958) によれば、バングラデシュ人民共和国にも話者がいる。先行文献 (§2.1) の記述と筆者によるインフォーマントへの聞き取り調査をもとに、ミャンマーにおけるアショー・チン語の使用地域を図1に示した。

SIL International の報告によると、2011年の時点でミャンマー側に約30,000人、バングラデシュ側には約4,000人のアショー・チン語話者がいる。本稿で考察の対象とする言語は、ミャンマー連邦共和国ヤンゴン市におけるアショ

一・チン語であり、主な調査地点はヤンゴン市北西部のインセイン地区である。

チン語支に属する言語の多くは、アラカン山脈中部のチン丘陵で話されている。しかし、アショー・チン語を母語とする人々の多くはエーヤワディー川下流域の平野部およびアラカン山脈南端部で農業を主業として暮らしており、古くから「平地チン族 (Plain Chin)」あるいは「南方チン族 (Southern Chin)」と呼ばれてきた。

また、アショー・チン民族党 (The Asho Chin National Party) によると、アショー・チン語を話す人々はビルマ族やカレン族、ヤカイン族が多数派を占める地域で長く暮らしてきた。特にエーヤワディー川下流域にはビルマ族が多く暮らしており、アショー・チン語は、他のチン語支の言語に比べると、語彙の面でビルマ語からの影響を強く受けている。

近年のミャンマーにおける政治と経済の改革に伴い、アショー・チン語話者によるエスニック・アイデンティティ形成の動きは以前より活発化している。2012年2月アショー・チン民族党が正式な政党としてミャンマー政府から公認を受けた。さらに、アショー・チン語話者の多いキリスト教教会や仏教僧院から支援を受け、アショー・チン言語文化中央委員会 (Asho Chin Literature and Culture Central Committee) が発足した。アショー・チン語による雑誌 အရှုအဝိစိန် /*ʔăcáʔăwásózón*/ (『アショーの光雑誌』) の発行や初等読本の作成、言語文化に関するワークショップ開催などの活動を進めている。

2. 先行研究

2.1 言語資料

管見の限り、アショー・チン語を言語学的な観点から記述したものには、Fryer (1875) によるアショー・チン語サンドウエ (Sandoway) 方言の文例集と基礎語彙リスト、Houghton (1895) によるアショー・チン語ミンブー (Minbu) 方言の文例集、そして以上の文献をまとめた Grierson によるアショー・チン語の概説 (Grierson 1904: 331-346) がある。どれも独自のラテン文字表記法でアショー・チン語を記述しており、現在ヤンゴン市内で話されているアショー・チン語とも大きく異なるようである。本稿ではアショー・チン語の音韻と文字を紹介した後、アショー文字と音素表記を用いた基礎語彙リストを提示する。

2.2 呼称

チン語支の言語を母語とする民族集団をビルマ語では総じて「チン (Chin)」という外名 (exonym) で呼ぶ。VanBik は、チンという外名がアショー・チン語

で「人間」を意味する名詞 /kʰláuɴ/ に由来するのではないかと推測した¹ (VanBik 2009: 4)。

北部チン語群のティディム・チン語や中部チン語群のミゾ語では内名 (endonym) として「ゾウ (Zo)」という呼称を用い、南部チン語群にも「チョウ (Cho)」という同系の言語名がある (Khoi Lam Thang 2001: 7)。インフォーマントによれば、/ʔáəá/ すなわち「アショー」は、アショー・チン語を話す人たちの内名であり、上記の「ゾウ」や「チョウ」といった名称と同系である。しかし、その語源と意味に関する詳細は不明である。

2.3 方言

Grierson によると、アショー・チン語はチッタゴン丘陵付近で話される北部方言と、それより南方のヤカイン州で話される南部方言の少なくとも2種類の方言に分かれる (Grierson 1904: 341-342)。また、VanBik は、アショー・チン語話者から聞いた話として、アショー・チン語には Settu, Laitu, Awttu, Kowntu, Kaitu, Lauku という6種類の地域方言があり、各方言間において相互理解の可能性は高いと述べている (VanBik 2009: 37-38)。しかし、上述の通りアショー・チン語の言語資料は極めて少なく、各方言の実態は未だ把握できていない。アショー・チン語の方言分布を見るにはより広範囲での調査が必要である。ただし、西側と東側で方言差があることはインフォーマントも度々指摘している。

3. 本稿で扱うデータ

本稿で提示するアショー・チン語のデータは、2012年の7月から9月までの合計約2か月間、および2013年の1月と9月の合計約1か月間に筆者がヤンゴン市インセイン地区のアショー・バプティスト教会 (Asho Baptist Church) で得たものである。

ヤンゴン市北西部のインセイン地区にはアショー・バプティスト教会がある。教会ではアショー・チン語による日曜礼拝や各種集会、日曜学校などが定期的に行われており、毎回多くの話者が参加している。また、この地区にはアショー・チン民族党とアショー・チン言語文化中央委員会の事務局もある。

インセイン地区にはアショー・チン語を母語とする住民のほかにも、ビルマ

1 通時的に見て、ビルマ語の子音結合 <*khl-> はある時点から <*khy-> に推移した。さらに、現代ビルマ文字 <khy-> は現代口語ビルマ語で [tɕʰ] という音価を持ち、<-aŋ> という綴りは [ŋ] という音価を持つ。アショー・チン語の /kʰláuɴ/ 「人間」がビルマ語における外名 <khláŋ> [tɕʰŋ] 「チン」の語形と似ていることから、「チン」の語源に何らかの関連性があるのではないかと VanBik (2009: 4) は推測した。

語やカレン語、モン語などを母語とする話者が多く暮らしている。また、調査の時点において学校教育で使用する言語はビルマ語と英語に限られており、日常でのコミュニケーションでもビルマ語を用いる機会が多い。その為、ヤンゴン市内に限って言えば、アショー・チン語話者の大半はビルマ語との完全なバイリンガルだと言ってもよい。

調査協力者は、ヤンゴン市出身のアショー・チン語話者 Salai Kyaw Htwe Hercules 氏である（以下、SKH 氏と呼ぶ）。SKH 氏は1962年7月生まれの男性で、両親はヤカイン州のグワ (Gwa) 市出身である。SKH 氏は日頃から親族や近所の人たちとアショー・チン語で会話する機会が多い。また、アショー・チン言語文化中央委員会の主要メンバーとして文化的イベントの企画・運営やアショー・チン語の初等読本の編集に携わるなど、アショー・チン語話者の言語状況と文化に関して豊富な知識を持っている。そこで、SKH 氏から全面的な協力を受け、ビルマ語を媒介言語としてアショー・チン語の基礎語彙と基本的な文法事項に関する聞き取り調査を行った。

4. 音韻

4.1 音節構造

音節構造は C1 (C2) V1 (V2) (C3) /T と表すことができる。C1 は頭子音、C2 は介子音、V1 は主母音、V2 は副母音、C3 は末子音、そして /T は音節全体にかぶさる声調を示す。

4.2 子音

	両唇音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	/p/, /pʰ/, /b/	/t/, /tʰ/, /d/		/k/, /kʰ/, /g/	/ʔ/
鼻音	/m/, /hm/ [m̥m]	/n/, /hn/ [n̥n]	/ɲ/, /hɲ/ [ɲ̥ɲ]	/ŋ/, /hŋ/ [ŋ̥ŋ]	
入破音	/ɓ/	/ɗ/			
摩擦音		/s/, /sʰ/, /z/	/ɕ/		/h/, /ɦ/
接近音	/w ² /	/r/ [ɹ]	/y/ [j]		
側面音			/l/, /hl/ [ll]		
破擦音		/c/ [tɕ], /cʰ/ [tɕʰ], /j/ [dʒ]			

² 有声両唇・軟口蓋接近音

音節中、上記のどの子音音素も C1 として現れうる。C2 の位置には /w, y, l/ が現れうる。C3 の位置に現れうる子音は /ʔ/ のみである。また、/h/ は機能語のみに現れる。

以下に入破音 /b, d/ とそうではない音 /b, d/ のミニマルペアを挙げる。

/bón/	「抱く」	/bón/	「うで」
/dón/	「測る」	/dón/	「死ぬ」

4.3 母音

アショー・チン語の母音には /i, ɪ, e [e(ɪ)], ε, a [a ~ a], ə [ə(ɔ) ~ ɾ(ɔ)], ɔ, o, ɒ, u, ai [ai], au [aʊ]/ がある。母音の長短は弁別的ではない。なお、例えば /sʰi/ 「馬」と /sʰi/ 「馬」など、語によって /i/ と /i/ が交替可能な場合もあり、/i/ と /i/ の区別は話者によってあいまいなこともある。

/éin/	「負ける」	/éin/	「暗い」
/wí/	「腐る」	/wí/	「うさぎ」

さらに、上述の母音にはそれぞれに対応する鼻母音がある。音素表記上、母音の後に /n/ を付加することで鼻母音を表す。例えば、/in/ は /n/ の直前の母音 /i/ が鼻母音化していることを表す。

4.4 声調

声調素には低声調 / ` / と高声調 / ´ / の2種類がある。ただし、高声調 / ´ / の音節と低声調 / ` / の音節が融合した形式など、一部の機能語では顕著な下降ピッチも見られる。本稿ではこの下降ピッチを低声調の異調として扱う。また、声調を持たない音節、すなわち軽声とみられる音節がある。軽声音節は常に開音節で、音節中に現れる母音は /a/ のみである。本稿ではこれを /ǎ/ [a] と記す。

5. 文字

アショー・チン語を書き記すには、一般的にアショー・チン文字を用いる³。現在、キリスト教教会を中心にアショー・チン文字の積極的な普及活動が行わ

³ 最近ではラテン文字によるアショー・チン語の表記法も用いられるようになっており、話者の間でどちらを採用すべきかという議論も上がっている。

れており、この文字で書かれた初等読本や雑誌、キリスト教の新約聖書などの刊行物もある。アショー・チン文字はキリスト教の宣教師が考案したものであり、インド系文字の流れをくむキリスト教ポー・カレン文字をもとにして作られた (Baptist Board of Publications 1952 [1998], 加藤 2001)。

基本となる文字は子音字母であり、その音価には母音 /a/ [a] が内在している。その他の母音を書き表すには、子音字母の上、下、右に母音記号を付加する。そして、右端に声調記号を付加することで声調を示す仕組みになっている。なお、以下の記述からは音素表記に / / を付加しない。

5.1 子音字母

字母の形はビルマ文字と同じだが、一部音価が異なる。<> 中に示した翻字は、 η <r_h_> *εǎ* を除き、代表的な音価と概ね一致する。なお、子音字母は単独で現れると、軽声音節を示す。字母あるいは介子音記号を伴う字母が単独で現れる場合、翻字では便宜上子音字の後に <_> を加える。たとえば、 $\infty\eta$ <b_he^H> 「頬」は、*bǎhé* で実現する。

∞	ϵ	η	ζ	\circ	∞	ϵ	∞	∞
<k_>	<k ^h _>	<g_>	< η _>	<s_>	<s ^h _>	<z_>	<n_>	<t_>
∞	ϵ	ϵ	η	\circ	\circ	\circ	∞	ϵ
<th_>	<d ^f _>	<d_>	<n_>	<p_>	<p ^h _>	<b_>	<b_>	<m_>
∞	η	η	∞	\circ	∞	∞	ϵ	
<y_>	<r_>	<r_h_> <i>εǎ</i>	<l_>	<w_>	<h_>	<?_>	<h_>	

子音字母の直前に子音字母 ϵ <h_> を付加することがある。この場合、子音 *h* からなる軽声音節 *hǎ* を示すのではなく、後続の子音が有声化することを表す。例えば、 \circ <p_>, ∞ <t_>, ∞ <k_>, ϵ <s_> の子音字母の直前に ϵ <h_> を加えると、それぞれ $\epsilon\circ$ <h_p_> *bǎ*, $\epsilon\infty$ <h_t_> *dǎ*, $\epsilon\infty$ <h_k_> *gǎ*, $\epsilon\epsilon$ <h_s_> *zǎ* と有声化した子音になる。なお、アショー・チン語では、否定形、他動詞化形、逆行標識 (inverse marker) *mǎ-* の付加する形において動詞の初頭子音がしばしば有声化する (例 (1) - (3) 参照)。この場合には必ず子音字母 ϵ <h_> を用いて有声化を示す。

- (1) *báv=lá?* $\epsilon\circ\eta\epsilon\eta$ 「話さない」
 話す=[否定] <h_pO^Hla^H> (動詞の原形: *páv-* 「話す」)

- (2) *bó=fiá?* $\text{e}^{\text{h}}\text{p}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}$ 「膨らませた」
膨らませる=[叙実] $\langle \text{h_po}^{\text{h}}\text{fiá}^{\text{h}} \rangle$ (動詞の原形: *pó-* 「膨らむ」)
- (3) *mă-dá=fiá?* $\text{e}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}\text{p}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}$ 「私を持ち上げた」
[逆行]-持ち上げる=[叙実] $\langle \text{m_h_ta}^{\text{h}}\text{fiá}^{\text{h}} \rangle$ (動詞の原形: *tá-* 「持ち上げる」)

◦ $\langle \text{p_} \rangle$, $\text{m} \langle \text{t_} \rangle$, $\text{m} \langle \text{k_} \rangle$, $\text{e} \langle \text{s_} \rangle$ 以外の子音に $\text{e} \langle \text{h_} \rangle$ を付加することもある。この場合、音節中の母音を息もれ音 (breathy voice) で発音することがあると SKH 氏は指摘した。しかし、実際の発話では息もれ音で現れないことも多く、明確なミニマルペアも見つかっていない。少なくともヤンゴン在住のアショー・チン語話者の間では息もれ音の出現頻度が低く、否定、他動詞化、逆行標識を明示するため、あるいは慣例的に $\text{e} \langle \text{h_} \rangle$ を付けて書き表していると考えられる (例 (4), (5) 参照)。今回の調査では十分なミニマルペアも得られなかった為、上記の息もれ音を異音として、母音音素からは除外した。

- (4) *hmá?=lá?* $\text{e}^{\text{h}}\text{p}^{\text{h}}\text{f}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}$ 「知らない」
知る=[否定] $\langle \text{h_mha}^{\text{h}}\text{la}^{\text{h}} \rangle$ (動詞の原形: *hmá?*- 「知る」)
- (5) *s^hé* $\text{e}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}}\text{p}^{\text{h}}$ 「市場」
市場 $\langle \text{h_s}^{\text{h}}\text{e}^{\text{h}} \rangle$

5.2 介子音記号

介子音記号には $\text{y} \langle \text{-y} \rangle$, $\text{l} \langle \text{-l} \rangle$, $\text{w} \langle \text{-w} \rangle$, $\text{h} \langle \text{-h} \rangle$ の4種類がある。このうち、介子音記号 $\text{h} \langle \text{-h} \rangle$ は鼻音または側面音と結合して無声化音 *h-* を示す。以下、子音字母 $\text{m} \langle \text{-m} \rangle$ に4種類の介子音記号がそれぞれ結合した例を示す。2つ以上の介子音記号が結合することもある。

y	l	w	h
$\langle \text{my_} \rangle$	$\langle \text{ml_} \rangle$	$\langle \text{mw_} \rangle$	$\langle \text{mh_} \rangle$ <i>hmă</i>

なお、介子音記号 $\text{y} \langle \text{-y} \rangle$ が軟口蓋破裂音を表す文字に結合すると、その音価は硬口蓋破擦音を表す。すなわち、 $\text{m} \langle \text{k_} \rangle$, $\text{e} \langle \text{k}^{\text{h}} \rangle$ または $\text{e} \langle \text{g_} \rangle$ に介子音記号 $\text{y} \langle \text{-y} \rangle$ を付加した場合、それぞれ $\text{m} \langle \text{ky_} \rangle$ *că*, $\text{e} \langle \text{k}^{\text{h}}\text{y_} \rangle$ *c^hă*, $\text{e} \langle \text{gy_} \rangle$ *jă* となる。

5.3 母音記号

アショー・チン文字における母音記号を以下に示す。

ᵢ	ᵑ	ᵑ̄	ᵑ̇	ᵑ̈	ᵑ̉	ᵑ̊	ᵑ̋	ᵑ̌	ᵑ̍	ᵑ̎	ᵑ̏
<i>	<e>	<ε>	<Y>	<ə>	<ɪ>	<ʊ>	<u>	<o>	<ɔ>	<O>	
i	e	ε	ai	ə	ɪ	ʊ	u	o	ɔ	av	

母音記号に ɔ̄<-:> (呼称: ᵑ̄ᵑ̄ <di^HdON^H> *dídáov*) あるいは ɔ̇<-^> (呼称: ᵑ̇ᵑ̇ᵑ̇ <ko^Hko^Hlo^L> *kó?kálò*) を加える場合がある。これらは方言間で規則的な音韻対応が見られる場合に用いる (Baptist Board of Publications 1952 [1998])。この記号がつく場合、ひとつの綴りで2通りの読み方がある。

ɔ̄	ɔ̇	ᵑ̄	ᵑ̇	ᵑ̇
<-:>	<-ε:>	<-ɔ:>	<-ɔ^>	<-o^>
-a 又は -ai	-ε 又は -ai	-ɔ 又は -ε	-ɔ 又は -u	-o 又は -ə

5.4 声調記号

子音字母に何の母音記号も付加せず、声調記号のみを加える場合、音節中の母音は *a* となる。また、(8) から (11) に挙げた声調記号には鼻母音化や末子音 ? の後置といった声調以外の要素も含まれる。

- (6) 高声調記号 ɔ̄ (呼称: ᵑ̄ᵑ̄ᵑ̄ <kə^Hlə^H?> *kə?lá?*)
 例 ᵑ̄ᵑ̄ <lo^H> ló 「頭」
- (7) 低声調記号 ɔ̇ (呼称: ᵑ̇ᵑ̇ᵑ̇ <k_mli^H?> *kāmlí?*)
 例 ᵑ̇ᵑ̇ᵑ̇ <pa^L?o^L> pà?ò 「肩」
- (8) 高声調鼻母音化記号 ɔ̄̃ (呼称: ᵑ̄̃ᵑ̄̃ᵑ̄̃ <kə^Hlə^Hce^Lnhi^H> *kə?lá?cèhní*)
 例 ᵑ̄̃ᵑ̄̃ᵑ̄̃ <mon^Hs^hɔ^N> móns^hón 「唇」
- (9) 低声調鼻母音化記号 ɔ̇̃ (呼称: ᵑ̇̃ᵑ̇̃ᵑ̇̃ <k_mli^Hce^Lnhi^H> *kāmlí?cèhní*)
 例 ᵑ̇̃ᵑ̇̃ᵑ̇̃ <s^hɔ^N> s^hón 「髪」

(10) 高声調促音化記号 $-p$ (呼称 : $\text{m}^{\text{H}}\text{p}$ <k_ku^H> kākó?)
 例 $\text{m}^{\text{H}}\text{p}$ <mi^H> mí? 「眼」

(11) 低声調促音化記号 $-l$ (呼称 : $\text{m}^{\text{L}}\text{l}$ <k_kw^H> kāk^{wá})
 例 $\text{m}^{\text{L}}\text{l}$ <zo^L> zò? 「肺」

5.5 文字の綴りと発音の不一致

現行のアショー・チン文字による表記法では、綴りと実際の発音が一致しないことがある⁴。例えば、語中において無声子音の文字を有声子音で発音する場がある。

(12) $\text{b}^{\text{H}}\text{ny}^{\text{H}}$ <bɔn^Hkyi^H> bónjǐ 「肘」

また、2音節以上からなる複合語において、1音節目を軽声音節で発音する場がある。

(13) $\text{s}^{\text{H}}\text{t}^{\text{H}}\text{e}^{\text{H}}$ <so^Lth^H> sǎthé 「金持ち」
 (参照 : sò 「息子」 + thé 「豊かだ」)

(14) $\text{t}^{\text{H}}\text{w}^{\text{H}}\text{l}^{\text{H}}\text{u}^{\text{H}}\text{n}^{\text{H}}\text{t}^{\text{H}}\text{á}$ <twil^Hun^Hth^HY^H> tǎ^Húnt^Há 「ヒョウタン」

さらに、同化現象によって拘束形態素の綴りと発音が一致しないことがある。例えば、以下の (15) と (16) に挙げる同化現象は綴りに反映されない。

$\text{h} \rightarrow \eta / \text{N}_-$

(15) $\text{w}^{\text{H}}\text{h}^{\text{H}}\text{a}^{\text{H}}\text{p}$ <wOn^Hh^Ha^Hp> wáɔn=ηá? 「入る」
 入る=[叙実] (叙実法助詞 : <h^Ha^Hp> =há?)

(16) $\text{c}^{\text{H}}\text{h}^{\text{H}}\text{a}^{\text{H}}$ <con^Hh^Ha^H> cón=ηá 「学校に」
 学校=に (所格助詞「に」 : <h^Ha^H> =há)

⁴ 声調記号と実際の声調が異なることもあるが、本稿では扱わない。

24.	seed	種	(အ)အံ့ <(?)?wi ^H >	(?ǎ)wí
25.	leaf	葉	(အ)လိ <(?)lɔ? ^H >, (အ)နီ <(?)nho ^H >	(?ǎ)lɔ? ^N , (?ǎ)hnó
26.	root	根	(အ)ယု <(?)yUN ^L >	(?ǎ)yòN
27.	bark	樹皮	(အ)ဂို <(?)gon ^L >	(?ǎ)gòN
28.	skin	皮	(အ)အူ <(?)?uN ^L >	(?ǎ)?ùN
29.	flesh	肉	(အ)ဆီ <(?)s ^h o ^L >	(?ǎ)s ^h ò
30.	blood	血	(အ)ထံ <(?)t ^h i ^L >	(?ǎ)t ^h i
31.	bone	骨	(အ)ယိ <(?)yo ^H >	(?ǎ)yó
32.	grease	脂	(အ)ထီ <(?)t ^h O ^H >	(?ǎ)t ^h áO
33.	egg	卵	(အ)ထွဲ <(?)twe ^H >	(?ǎ)twé
34.	horn	角	(အ)ကံ <(?)kyi ^L >	(?ǎ)ci
35.	tail	尻尾	ဟိမ္မ <ho ^L me ^L >	hòmè
36.	feather	羽	(အ)ဖုရီ <(?)p ^h ya ^H mhɔ ^Λ >	(?ǎ)p ^h yáhmò
37.	hair	髮	(အ)ဆီ <(?)s ^h oN ^L >	(?ǎ)s ^h òN
38.	head	頭	(အ)လု <(?)lo ^H >	(?ǎ)lú
39.	ear	耳	နီဂို <nho ^L gaUN ^L >	hnògàUN
40.	eye	目	(အ)မိ <(?)mi? ^H >	(?ǎ)mí?
41.	nose	鼻	နာထီ <nha? ^L t ^h O ^H >	hnà? ^L t ^h ó
42.	mouth	口	ဟိခိ <hO? ^L k ^h O ^H >	hàO? ^L k ^h ó
43.	tooth	齒	(အ)ဟိ <(?)ho ^H >	(?ǎ)hó
44.	tongue	舌	မုထီ <mle ^H foN ^L >	mlébòN
45.	claw	爪	(အ)မိ <(?)diN ^L >	(?ǎ)dīN
46.	foot	足	ခိဆီ <k ^h o ^L s ^h aUN ^H >	k ^h òs ^h áUN
47.	knee	膝	ခဲလု <k ^h o ^H o ^H >	k ^h óló
48.	hand	手	(အ)ကူ <(?)ku? ^H >	(?ǎ)kú?
49.	belly	腹	(အ)ပု <(?)pu? ^H >	(?ǎ)pó?
50.	neck	首	လုခိ <lha? ^L k ^h O ^H >	hlāk ^h ó
51.	chest, breasts	胸	ကးဇု <ka:N ^H za:N ^L >	kánzàN
52.	heart	心	(အ)မု <(?)mlUN ^H >	(?ǎ)mlón
53.	liver	肝	(အ)ဆီ <(?)f _i t ^h IN ^H >	(?ǎ)t ^h iN
54.	drink	飲む	အိ- <?o? ^L ->	?ò?
55.	eat	食べる	အဲ- <?e ^H ->	?é-
56.	bite	噛む	အိ- <?o? ^L ->	?ò?

57.	see	見る	ဆီလ်- <shʰʌʔL->	sʰòʔ-
58.	hear	聞く	ယိလ်- <yOʔL->	yàʊʔ-
59.	know	知る	မှ- <mhaʔH->	hmáʔ-
60.	sleep	寝る	အိမ်- <ʔiʔH->	ʔiʔ-
61.	die	死ぬ	ဒု- <duʰ->	dǝ-
62.	kill	殺す	တု- <tuʔH->	tóʔ-
63.	swim	泳ぐ	တို့ ယ- <twiʰ yəʰ->	twì yá-
		【註】 တို့ <twiʰ> twì 「水」		
64.	fly	飛ぶ	ပု- <pyʰ->	pá-
65.	walk	歩く	လိ၊ ဝို- <lonʰ ɛoʔH->	lòN ɛóʔ-
		【註】 လိ၊ <lonʰ> lòN 「道」		
66.	come	来る	လိ၊- <loʰ->	lò-
67.	lie	横たわる	ကျ၊ ကျ၊- <klɔʰkla:Nʰ->, တု၊ ဝို၊- <tunʰmlunʰ->	klòklàn- túnmlún-
68.	sit	座る	ခိ၊ အိ၊- <kʰoʰ ʔʌʰNʰ->	kʰó ʔòN
69.	stand	立つ	တု- <duʰNʰ->	dón-
70.	give	与える	ဲ- <pe:ʔL->	pàʔ-
71.	say	言う	ဟိ၊- <hoʰ->	háʊ-
72.	sun	太陽	ခန့်- <kʰ_niʰ->	kʰǎní
73.	moon	月	ခို- <kʰloʰ->	kʰló
74.	star	星	အဆိ၊ <ʔaʰsʰiʰ->	ʔásʰí
75.	water	水	တို့ <twiʰ->	twì
76.	rain	雨	ယိ၊ <yoʰ->	yó
77.	stone	石	လု၊ <luʰNʰ->	lòN
78.	sand	砂	ဆန့် <sh_nYʰ->	sʰǎnàʔ
79.	earth	土	ဲ- <de:ʔH->	dáʔʔ
80.	cloud	雲	မှဆိ၊ <meʰsʰiʰL>, ယိဆိ၊ <yoʰsʰoʰL>	mésʰì, yósʰò
81.	smoke	煙	မှ၊ ခု၊ <meʰkʰuʰL>	mèkʰò
82.	fire	火	မှ၊ <meʰL>	mè
83.	ash	灰	ထု၊ မှ၊ <thʰanʰmhuʔL>	thʰànʰmùʔ
84.	burn	燃える	အိ၊- <ʔoʰL->	ʔò-
85.	path	道	လိ၊ <lonʰL>	lòN
86.	mountain	山	တု၊ <zuʰNʰL>	zòN
87.	red	赤い	ဆဲ- <shʰɛNʰL->	sʰɛN-

88.	green	緑色だ	ə̀j- <sin ^L ->	sín-
89.	yellow	黄色だ	ə̀ŋe- <?wε: ^H ->	wár-
90.	white	白い	ɔ̀il- <boʔ ^L ->	boʔ-
91.	black	黒い	ŋ̄p- <niʔ ^H ->	níʔ-
92.	night	夜	ə̀wɔ̀ <?_yan ^H ->	ʔáyan
93.	hot	暑い	ɔ̀jɔ̀p- <lhoʔ ^H ->	hlóʔ-
94.	cold	寒い	ɔ̀ɔ̀ɔ̀ - <yɔ: ^L ->	yò-
95.	full	満ちる	ɔ̀jɔ̀ - <lwi ^H ->	lwí-
96.	new	新しい	ɔ̀ɔ̀ - <ʰa ^H ->	ʰá-
97.	good	良い	ɔ̀ŋe- <pwe: ^H ->	pwár-
98.	round	丸い	ɔ̀ŋ - <wa: ^{NH} ->	wán-
99.	dry	乾いた	ɔ̀ŋil - <ho ^Λ ->	hò-
100.	name	名前	ə̀j <min ^H ->	mín

謝辞

本調査は、日本学術振興会特別研究員奨励費(課題番号:24・10915)の助成を受けたものである。また、ヤンゴン在住のアショー・チン語話者 Salai Kyaw Htwe 氏, Salai Aung Min Hlaing 氏, Salai Tun Hlaing 氏の多大なるご支援と有益な助言無くして本稿を執筆することはできなかつた。ここに深く感謝申し上げる。

参考文献

- Baptist Board of Publications (1952 [1998]) *ASHÖ SOUTHERN CHIN PRIMER*.
Rangoon: Baptist Board of Publications.
- Bernot, Denise and Lucien Bernot (1958) *Les Khyang des collines de Chittagong (Pakistan oriental): matériaux pour l'étude linguistique des Chin*. (L'Homme, Cahiers d'Ethnologie, de Géographie et de Linguistique, Nouvelle Série, 3.) Paris: Librairie Plon.
- Bradley, David. (1997) "Tibeto-Burman languages and classification." In: David Bradley (ed.) *Tibeto-Burman Languages of the Himalayas, Pacific Linguistics Series A*. 86:1-72. Canberra: Australian National University.
- Fryer, G. E. (1875) "On the Khyeng people of the Sandoway District, Arakan." *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 44: 39-82.
- Grierson, George A. (1904) "SHÖ OR KHYANG" *Linguistic survey of India: Tibeto-Burman family, Specimens of the Kuki-Chin and Burma groups*. 3 (3): 331-346. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing.

- Houghton, Bernard. (1895) "Southern Chin Vocabulary (Minbu District)." *Journal of the Asiatic Society* 27.4: 723-737.
- 加藤昌彦 (2001) 「キリスト教ポー・カレン文字」河野六郎他編著『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』 333-337. 東京: 三省堂.
- Khoi Lam Thang (2001) *A phonological reconstruction of proto Chin*. M.A. Thesis. Chiang Mai: Payap University.
- 西田龍雄 (1989) 「チン語支」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典 世界言語編』中2: 995-1008. 東京: 三省堂.
- SIL (Summer Institute of Linguistics) International "Chin, Asho | Ethnologue"
<http://www.ethnologue.com/language/csh> (accessed 2015-2-13)
- Swadesh, Morris (1971) *The origin and diversification of language*. Edited post mortem by Joel Sherzer. Chicago: Aldine.
- VanBik, K. (2009) *Proto-Kuki-Chin: A reconstructed ancestor of the Kuki-Chin languages*. STEDT monograph 8 UC Berkeley.

Asho Chin Phonology and Orthography

OTSUKA Kosei

(Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of
Foreign Studies / Japan Society for the Promotion of Science)

The Asho Chin language, also known as Khyang, belongs to the Kuki–Chin subgroup of Tibeto–Burman languages and is mainly spoken in western Myanmar. This paper aims to briefly overview the modern phonological system and orthography of the Asho Chin dialect spoken in Yangon, as well as to present its basic lexicon.

(初稿受理日 2014年3月22日 最終稿受理日 2014年8月8日)